

一声社・新電話：

TEL03-6676-2179/FAX03-6326-8150

## 閑話休題—あわや遭難②

生まれて初めてのスキー。八方尾根の一番上に取り残されたヨネやん達初心者 4 人組の運命やいかに？

「大丈夫か～！ なんぼ待ってもお前らが全然来おへんから、どないしたんかと思うて」—地獄に仏とはまさに D 先輩。

「もうすぐ暗あなるで。ちょっと急ごか」。D 先輩の励ましで、何とか少しずつ滑っているヨネやん達。しかし、ここでまたとんでもない事件をヨネやんが引き起こす！

何とか滑れるようになったヨネやんは、調子に乗って自分だけ先に滑り降りてしまう。ふと振り返ると、他の 3 人と D 先輩の姿が見えない。「しゃあない。ここで待と」。でも全然来ないみんなにしびれを切らしたヨネやんは、立ちっぱなしと締め付けるスキー靴が嫌になってしまう…。

スキー板を外して雪に突き刺し、みんなが来るのをひたすら待つうち、突然**バタツ**と音がする。「なんやろ？」と振り返ったヨネやんが見たモノは？ 斜面をコース外に滑って行く 1 本のスキー板。「あれ？もしかして」。そうです。ヨネやんのスキー板が、一人で山の斜面を見事に滑り降りて行ったのです！ えらいこっちゃあ～！ 呆然と眺めるだけのヨネやんの耳に D 先輩の声がまた聞こえてきた。

「こら～！ 自分だけ先に行ったらアカンやろ。えっ？ スキー板がないやん。どないしたん？ なに！ 板だけ滑って行ったあ！ なんで板を外すねん。そんで、どこや？ あの斜面の下か！ 僕が何とかする。お前は、歩いて少しずつ降りときや」

なんという人の良さだろう、D 先輩。僕の不注意で滑り落ちたスキー板を取りにコース外の崖を滑って行ってくれたのだ。

やがて他の仲間や僕のスキー板を担いだ D 先輩とも合流したヨネやんだが、もうあたりはずっかり暗い。「みんな！ もうちょっとや。あそこに見える明かりが宿のあたりやで！」。

「…まだ、あんなに下にあるんか…」—もうアカン、疲れ果てた—その時、大きな声が聞こえて来た。「大丈夫ですか～！」。

パトロール隊のお兄さん達がヘッドライトを付けながら降りて来たのだ。「助かった！ あの人らに連れて帰ってもらお！」。暗闇に希望の光を見たヨネやんの耳に D 先輩の声が…。

「大丈夫ですよ。自分らで降りれますから」。お兄さん達は、「そうですか！ では気を付けて！」と元気よく降りて行った。「嘘やろ？」

その後も悪戦苦闘するヨネやん達。声を掛け合う元気もない、みんなずっと無言。何とかかんと疲れ果てた体を引きずって宿に帰って来たヨネやん達。「ただいま…」。ふと目を上げると、例の 4 回生 T 先輩達は、夕食を食べ終わり、ビールまで飲んですっかりくつろいでいる。その T 先輩が一言。「遅かったな～」。

…遅かったなあ～ちゃうやろ！ お金もない・スキーをやったこともないと渋る僕らを「教えるから大丈夫」と強引に誘っておきながら、自分は一度も教えることなく、無理やり山の上まで連れて行って置き去りにし、帰って来ないのに探しにも行かず、ビールを飲んでくつろいで、拳句に「遅かったな」はないやろ！ …全て心の声。面と向かって言える度胸もなし。

「まさかの時の友は真の友」…人の良い恩人・D 先輩、みっちりコーチしてくれた Y 先輩。あの時は本当にありがとうございました！